平成 30 年 6 月 6 日

生徒の皆さんへ

武蔵野市立第四中学校長
竹　山　正　弘

開校記念日にあたって

６月６日は、本校 65 回目の開校記念日です。

第四中学校は、昭和 28 年４月１日に開校しました。４月７日には、入学式（武蔵野一中より２年生 133 名転入、新入生 122 名、3 年生なし）が行われ、４月 17 日まで、大野田小学校に間借りして、校庭での青空教室で授業を始めたそうです。**６月６日**に、開校式及び校旗樹立式を挙行し、この日を**開校記念日**と定めました。それ以来、多くの卒業生を輩出し、この春までの卒業生総数は、16,909 人になりました。

時代が変わり、校舎や校庭、体育館やプールも変わりましたが、それぞれが、中学生という多感な時期を過ごしていったのは、いつの時代も同じです。

第四中学校の校章は、市の木であるケヤキの「四枚の葉」と「中」のデザインを生徒が考え決定しました。材質が堅く用途が広いケヤキの木のように、強く逞しく、すくすくと伸びて欲しいという願いが込められています。また、校歌は、昭和 33 年に初代校長川崎庸三先生が作詞し、国枝重寿先生が作曲しました。皆さんにとってこの四中が最良の母校になって欲しいという思いが校歌に込められています。（詳しくは、裏面の校章の由来、校歌の由来を読んでください。）

先輩たちが理想を追求しながら築き上げてきた伝統をしっかり受け継ぎ、これから入学してくる生徒たちに繋いでいく、駅伝でいえば、襷を繋ぐように引き継いでいくことが大切です。先輩の作り上げた伝統や校風を受け継ぎ、みんなで協力し、さらにより良い学校を築いていって欲しいと思います。また、今まで学校の発展に尽くしてくれた方々や地域の方々の願いを知り、学校の一員、地域の一員としての自覚を高め、限りない愛校心を高揚して欲しいと思います。

第四中学校は今年度開校 65 年目の年を迎えています。人間でいう還暦から５年を過ぎ、さらに新しい時代を重ねていくところです。これまでの本校の歴史の重みを感じ取るとともに、次の飛躍への決意を新たにして欲しいと願っています。

１　校章の由来

昭和 28 年４月９日　徽章・バッジの図案を当時の生徒から募集しました。（応募者は約 20 名いたそうです。）

４月 20 日　徽章・バッジが決定し、全校に発表しました。

四中の校章は、４枚のケヤキの葉と真ん中に「中」のデザインから作られています。

ケヤキは武蔵野市の「市民の木」として選定されています。ケヤキは江戸時代、武蔵野に住み着いた人たちが風よけのために植えたと言われています。高さが 20ｍから 30ｍにもなり、木材としては木目が美しく、磨くと美しい光沢を生じます。材質が堅く、家具・建具等の指物や日本家屋の建築用材として古くから多用されています。

そのケヤキの木のように、強く、たくましく、すくすく伸びてほしいという願いから４枚（四中）のケヤキの葉の校章が選ばれました。

２　校歌の由来

四中の校歌は、昭和 33 年に初代校長の川崎庸三先生が作詞し、その当時の音楽科の国枝重寿先生が作曲しました。

１番から３番までの歌詞は、朝・昼・夕方を表していて、四中生の一日の生活を時間を追って表しています。

１番は、朝のさわやかな陽差しを浴びて登校する姿を表しています。今日一日を素晴らしい一日にしたいという希望に満ちあふれ、友人とのさわやかなあいさつから始まります。そして、その友人たちと励まし合いながら勉学に励んでいく、そんな四中生であってほしいという願いが込められています。

２番は昼にあたります。躍動感あふれる四中生の活発な姿を表しています。昼の燦々と輝く太陽の下で、勉強はもちろん、委員会活動や部活動などにも積極的に参加し、自分自身を磨くとともに、充実した３年間を送ってほしいという願いが込められています。

３番は夕方を表していますが、今日一日を静かな気持ちで振り返り、自分自身を見つめ、さらに前進していける人間になってほしいという願いが込められています。この３番には「くめどつきせぬこのいずみ」という一節があります。これは、四中生の一人一人はもちろんのこと、四中生全体として限りない力を秘めており、全力を尽くすほどに前進してゆけるということを表しています。また、３番には四中生にとってこの四中が最良の母校になってほしいという、この校歌のテーマも含まれています。

（開校五十周年記念誌より）